

# 生徒指導の機能を生かした授業運営と成果

松本浩幸

MATSUMOTO Hiroyuki

北海道三笠市立三笠中央中学校

Mikasa Chuo Lower Secondary School, Hokkaido

【キーワード】 課題方式、生徒指導の機能、自己決定、中学校

## 1 はじめに

国立教育政策研究所教育課程研究センターによる平成13年度教育課程実施状況調査では、中学2年生において「理科の勉強が好きだ」という解答は、どちらかといえばそう思うというものも含めて、53.3%ではない。国際的な調査と比較しても20ポイントほど低い値となる。本来自然科学は、児童生徒の興味・関心を引き起こし、主体的で意欲的な学習を進めることができる授業となるはずである。自然科学を系統的に学習を進め、児童生徒が「好きだ」「楽しい」と感じることでできる授業運営は、なされにくくなっている。授業運営のあり方と教師の役割は、理科の学力と密接な関係があると考えた。「生徒指導の機能」を生かした授業運営を系統的な内容の学習を通して実践することで、理科における学力を高め、児童生徒が好意的に受け止める授業のあり方を実践し、成果を得ることができた。

## 2 研究の方法

生徒指導の究極のねらいである自己指導力を高め、生徒の人間的な自立を促す指導を学校教育全体の中で、特に理科授業において探った。坂本昇一の「生徒指導」のねらい、方法原理、「生徒指導の機能」と、教育心理学者のデシ(E.L.Deci)のいう「自己決定」の考え方との関係から、理科授業の運営を考察し同一の生徒を対象とし3年間継続した研究を行った。授業の運営は、「課題方式」とし、豊かな授業実践を行った玉田泰太郎によるものを基本とした。「生徒指導の機能を生かした指導」の中で特に「自己決定」を生かし「課題方式」と融合させた授業を実践し、生徒の思考力を育て、全員が集中して学習に取り組む状態を実現することをねらった。生徒が、この授業をどのように受け止めたのかを調査し分析した。継続した授業の後、調査と授業実践を行った。調査は、質問紙による3回のアンケート調査によった。教師が生徒指導の機能を

生かして、教育相談的な授業を行っているかを、他教科と比較した。自己決定を中心とした課題方式の授業運営全般にわたる調査も行った。現行学習指導要領の内容の削減により系統的な学習が難しくなった中学校理科において、「エネルギーの変換と保存」の単元を生徒が主体的で意欲的に取り組むカリキュラムの提案を行い、実証授業を行い、その後の調査と合わせて分析した。

## 3 結果

研究の結果、次のことが明らかになった。

- (1) 日本の中学校理科教育は、生徒の関心が国際的にも低く授業運営についても工夫が求められているが、生徒指導の機能を生かした課題方式の授業で、中学校生徒の理科への関心を高めることができた。
- (2) 課題方式による授業では生徒指導の機能である、自己決定・自己存在感・共感的な理解を生かした授業を実現できる。
- (3) 課題方式による生徒の概念形成を伸長するカリキュラム開発とその実践については、エネルギーの変換と保存の単元分野のカリキュラム開発により、概念の獲得が充分に行われた。またこの授業実践を分析したことで、生徒が意欲的に授業に取り組むことがわかった。

## 4 今後の課題

義務学校現場の実態として、日常的にどのような授業運営がされているかの把握が難しく、改善の必要性の認識が薄いため、授業運営法に関心が持たれにくい。教師側の問題として、自己決定を中心とした生徒指導の機能を生かした授業運営を身につけるまでに時間がかかり、またその獲得の方法が明らかではない。そのため、実践授業を進めても交流が不十分である。同じように、実践授業を行ったがその分析法が未確立である。